法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」におけるHengest とジュート

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
351
(終了ページ / End Page)
367
(発行年 / Year)
2012-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007822

Hosei University Repository

『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest とジュート

法政大学キャリアデザイン学部教授　岩谷　道夫

1.

古期英語で書かれた詩の一つに、『フィンズブルフの戦』がある。それは、完全な形で今日に伝えられているわけではなく、冒頭の部分も、後半の部分も失われ、もともとは300行ほどであったとも推測されているが、今日伝えられているのは、全部で40行ほどである。内容は、中世西欧のゲルマン人国家フレーザン（フリージア）の国王フィンの城館フィンズブルフにおける、フレーザンとデネ（デンマーク）の戦についての詩である[(1)]。

一方、3000行以上に及ぶ古期英語最大の叙事詩『ベーオウルフ』の中に、「フィン王の挿話」と呼ばれる挿話があり、それは、『フィンズブルフの戦』と内容的に関連性を持っている。「フィン王の挿話」は、『フィンズブルフの戦』の終わった時点から始まる。『ベーオウルフ』には、いくつかの挿話があるが、「フィン王の挿話」は、『ベーオウルフ』の挿話の中でも、最も重要なものの一つである[(2)]。

『フィンズブルフの戦』と「フィン王の挿話」は、ほぼ同じ題材を取り上げ、登場人物も重なり、背景としての諸国家も実在した国家で、かつ異なった時代に異なった作者によって作成されたものであるので、取り上げられた題材は歴史的事実であり、おそらくは西暦5世紀の前半に生じた出来事をもとにしたものと考えられる。

『フィンズブルフの戦』と「フィン王の挿話」の両方に、Hengest という人

Hosei University Repository

物が登場する。『フィンズブルフの戦』では、Hengest は、フレーザンとの戦いが始まる直前の状況において、デネの側の将軍としてデネの王族フネフを支え、これから生じる戦いに備えている。一方、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」では、Hengest は主人公であると言ってもよいほどの重要な役割を持つ人物である。Hengest は、「フィン王の挿話」では、デネの戦いの相手国であるフレーザンに属する Eotan エーオタンと、何らかの関係を持つようにも描かれている。Eotan とは、アングル、サクソンとともにブリテン島に渡ったジュートのことであり、「フィンズブルフの戦」の当時、フレーザンの友邦部族として、フレーザンと共同社会を形成していた。また Hengest は、ベーダの『英国民教会史』、そして『アングロ・サクソン年代記』に言及されている、ブリテン島に初めて移住したゲルマン人のジュートの代表 Hengest [(3)] と同一人物であるという指摘がなされて来ている。つまり、Hengest は、『フィンズブルフの戦』そして『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の戦いの後、大陸を離れ、ブリテン島に向かい、イングランドにおける最初のアングロ・サクソン人国家であるケント王国をつくったと推測されているのである。そうであれば、デネの側の Hengest は、ジュートでなければならないが、「フィン王の挿話」には、Hengest はジュートであると明白には述べられていない。そこで Hengest がジュートであり、ブリテン島に渡った人物とする説と、Hengest はあくまでデネのデーン人であり、ブリテン島に渡った Hengest とは別人とする説の二つの説が主張されている。その二つの説について、筆者は検討を試みたことがあるが [(4)]、本稿では、まず前者の、Hengest がジュートであり、ブリテン島に渡ったとする説が歴史の真実に近いものであるということを確認したいと思う。また、「フィン王の挿話」の記述に関する限り、ジュートは、フィンズブルフにおける戦いに、極めて重要な関与を持っていた。その関与はどのようなものであったかについて考えたい。また、フレーザンとともに共同社会を作り、デネと戦ったジュートが、その後ブリテン島に渡ったとすれば、ジュートは、戦った相手国のデネの将軍であるジュートの Hengest のもとでブリテン島に渡ったことになるが、それに至る経緯はどのようなものだったのであろうか。本稿では、以上のような点について、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の記述を通して考え、Hengest とジュート

Hosei University Repository

に関する歴史の実体を追究したいと思う。

2.

『フィンズブルフの戦』は、40数行の詩であり、内容は、間近に迫るフレーザンとの戦いを前にした、デネの王族フネフの言葉と、デネの武将数人の描写で尽くされ、その戦闘が、どのような背景あるいは経緯で生じたかについては、全く触れられていない。あるいは、失われた最初の方の部分に、その背景あるいは経緯が書かれていたのかも知れない。しかしながら、デネの王族フネフの言葉により、フレーザンとデネの間に、古くから何らかの確執があったことが示唆されていて、それがその戦いの遠因となっていることが想像される。『フィンズブルフの戦』のフネフの言葉は、次のようなものである。

> 「いまのこの時、東から日が昇っているのでもなく、ここに龍が飛翔しているのでもなく、またこの館が燃えているのでもない。いや、許されざる敵が、武装して近づいているのだ。鳥は鳴き、狼は吠えている。槍がぶつかり合い、盾が槍をはじく。今は雲間に漂いながら月も輝き、悲しむべき所業が始まりつつある。それは、人に知れ渡ったこの遺恨に、苦い終止符を打つことだろう。目覚めよ、わが戦士達。よろいをまとい、武勲を念じ、誇り高く振る舞い、決然と立ち向かえ。」(5)

『フィンズブルフの戦』は、断片的なものであるが、残された部分からも、それは大変劇的な内容の詩であることが推測される。フネフは『ベーオウルフ』「フィンの挿話」にも言及され、そこでは戦死した人物として語られているのであるが、『フィンズブルフの戦』では、フネフは最初に登場し、敵の急襲を受けて、デネの武将たちに勇壮な調子で呼びかけるのが、上のフネフによる言葉である。『フィンズブルフの戦』は悲劇的な戦いであるにもかかわらず、そこで描かれているのは、戦いの中の勇猛さ、雄々しさ、潔さ、躍動する精神、生命の完全燃焼である。従って、そこから受ける印象は清々しく、爽快ですらある。

Hosei University Repository

その戦闘の背景や経緯が、その『フィンズブルフの戦』に書かれていなくても、私達はそれを知ることが出来る。それは、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」を通してである。『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」は、前述のように、『フィンズブルフの戦』の終わったところから始まる。そこでは、戦いそのものは描かれていないが、生じた戦闘の背景や経緯について、詳しく述べられているのである。それをもとに推測すれば、『フィンズブルフの戦』は、次のような状況のもとに起こったのであった。

デネ（今日のデンマーク）の王族に、フネフとヒルデブルフという兄妹がいた。妹のヒルデブルフは、フレーザン（フリージア）の国王フィンに嫁ぎ、息子が生まれる。ある時、デネのフネフは、妹と義理の弟であるフレーザンのフィン王のもとを訪れる。場所は、フィンの城館すなわちフィンズブルフであり、フネフは、部下として、デネの武将達、そしてその武将達を統率する Hengest という人物とその部下達を引き連れて、フィンの城を訪れたのである。ところが、フネフがフィンの城館に滞在していた時に、フレーザンのもとにいてフィンの臣下になっている Eotan エーオタンと呼ばれる人々を中心とするフレーザンの軍隊から、急襲を受ける。フネフも Hengest も勇敢に戦ったが、結局デネの側ではフネフが斃れ、一方、フレーザンの側も、フィンの息子が戦死する。双方に多くの死傷者が出て、和睦の交渉が始まる。その戦いの直前の状況が、『フィンズブルフの戦』で述べられている内容であり、戦いが終わり、和睦の交渉が始まる寸前の状況が、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の冒頭の部分になっている。

戦いの終焉した時点から記述を受け継ぐ形の『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」は、次のような言葉で始まる。

> まことにヒルデブルフは、Eotan エーオタンの真率な忠誠心を称える理由はなかった。自らに何の過失もないのに、彼女は、その盾のぶつかり合いの中で、愛する子どもと夫を奪われたのであるから。(6)

上で Eotan エーオタンと呼ばれているのは、アングル、サクソンとともに、ブリテン島に移住したジュートであるという点については、諸研究家の意見は

Hosei University Repository

ほぼ一致している。「フィン王の挿話」は、フィンズブルフにおける戦いの悲惨さについての記述から始まり、次に、フレーザンのデネとの和睦の交渉、葬儀の場面、和睦後のフィンズブルフに留まるHengestの心的状況、冬から春への季節の変化、そしてフレーザンの国王フィンに対するデネとHengestによる最終的な復讐が､淡々と述べられる。劇的な箇所はほとんど見出されない。ただ葬儀の場面が、『ベーオウルフ』の冒頭の、デネの国王の葬送についての部分と少し共鳴するような印象は与えるけれども。「フィン王の挿話」は、ひとえに、前述のEotanエーオタンによってヒルデブルフに悲劇がもたらされたことが強調されている。その内容は、デネのHengestがフネフの復讐に至るまでのHengestの心的状況を中心に構成された、『フィンズブルフの戦』の後日談とも言えるだろう。

3.

次に、フィンズブルフの戦いがなぜ起こったか、それにおけるジュートの関与はどのようなものだったのかについて、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」を通して考えてみたい。

『フィンズブルフの戦』により、フィンの下のフレーザンの軍隊と、フネフの下のデネの軍隊の間に激しい戦いがあったことは明らかであるが、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」では、少なくとも文面からは、フレーザンの国王のフィンが、必ずしもデネに対して、あるいはデネの国王フネフに対して、心から敵意を持っていたということは、伝わって来ない。その戦いは確かにフレーザン側にとっても、多大な損失であった。フレーザンの国王フィンは生き延び、デネの国王フネフは倒れたが、フィンの息子は戦死し、フレーザン側の人的損害は多大なものであった。その状況の下で、フレーザン側から和平の申し出がなされ、フィン王は、デネに対し、フィン王の城館の半分を、ジュートを含むデネに譲渡することになり、またデネに対し、財宝類が与えられ、フネフの家臣に対し、然るべき栄誉も与えられることになる。フレーザン側からすれば、デネの王族を倒したとは言え、自陣のほうも壊滅状態に近く、和睦のための提案は、やむをえないものであったと言えるかも知れない。ただフィン王

Hosei University Repository

の提案は、少なくとも「フィン王の挿話」の文面では、自陣の戦いの続行が不可能であるからという判断に加えて、おそらくはフレーザンにデネから嫁いできた妻ヒルデブルフへの配慮があって、なされているもののように感じられる。つまり、フィン王にとって、戦いはあくまで偶発的なものであり、もともとフレーザンとデネの間には、『フィンズブルフの戦』でフネフが述懐しているように、長きにわたる敵対関係はあったであろうが、少なくともフィンとフネフの間には、ヒルデブルフの関係もあり、個人的な敵対意識はなかったと考えられるのである。フネフがフィンの館を訪れたのも、妹の嫁ぎ先と親交を深める他に目的はなかったはずである。そうであれば、その戦いの原因は何だったのであろうか。上の「フィン王の挿話」の冒頭の言葉によれば、そこに Eotan エーオタンすなわちジュートが関係していることは確かであるが、その関与はどのようなものだったのであろうか。

フィンズブルフにおいて、フレーザンの側からのデネに対する急襲があり、それが戦いの直接的な原因であることは、『フィンズブルフの戦』のフネフの言葉からも明らかである。また、フネフは、フレーザンとデネの古くからの宿恨についても言及しており、それも戦いの遠因と言えるものであろう。『フィンズブルフの戦』には、ジュートについての言及は見出されないが、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」で戦いの原因として言及されているのは、Eotan エーオタン、すなわちジュートである。その場合、フレーザンの側にいたジュートが、昔からのフレーザンのデネに対する宿恨を、デネに代わって晴らそうとしたのであろうか。しかしそれでは、ヒルデブルフの立場は全く考慮されていないことになる。古くから敵対関係にあるフレーザンとデネであったからこそ、デネの王女ヒルデブルフは、フレーザンのフィン王に嫁いだと思われるからである。そのヒルデブルフの深慮を斟酌せずに、ジュートが、フレーザンのデネに対する古くからの恨みを、デネに代わって晴らすとすれば、それはすでに、ヒルデブルフに対する背信行為と言えるであろう。そうであれば、「まことにヒルデブルフは、Eotan エーオタンの真率な忠誠心を称える理由はなかった」という言葉の中の、「真率な忠誠心」は、存在しなかったことになるであろう。しかしながら、その「フィン王の挿話」の冒頭の言葉によれば、確かにジュートは、フィン王の王妃のヒルデブルフに対する真率な忠誠心を示

Hosei University Repository

していたのである[7]。そうなると、フレーザンの側の急襲の実質的な主体であるジュートの急襲の目的は何であったのであろうか。

そこで考えられるのは、フレーザンの側だけでなく、デネの側にもジュートがいて、その双方のジュートの間に、フレーザンとデネの間にあるのと同じような、遺恨の関係があったということである。ジュートが二派に分かれていたことについては、クレーバーによる指摘があり[8]、またレンも、その可能性について言及している[9]。しかし最もそれについて明快に確言したのは、トールキンである[10]。トールキンによれば、おそらくはフレーザンとデネの双方にジュートがいて、それぞれのジュートに相互の反目があり、それにより、フレーザン側のジュートが、フィンの館を訪れたデネの王族フネフの護衛軍として来たHengestを将軍とするジュートに対し、急襲を仕掛けたのであった。フレーザン側のジュートの急襲は、フネフではなく、デネの側のジュートに対するものであったのであるが、結果として、ヒルデブルフの兄のデネのフネフは戦死し、またヒルデブルフの息子のフレーザンの王子も戦死してしまった。それ故、たとえフレーザンに属するジュートが、ヒルデブルフに対して真率の忠誠心を持っていたとしても、「ヒルデブルフはジュートの真率さを称える理由はない」という記述がなされているのであろう。つまりそれは、フレーザンの側のジュートが、いかにフレーザンのフィン王の王妃ヒルデブルフに対して忠誠を誓おうと、デネの側のジュートとの反目を理由にデネの軍隊、とりわけジュートと戦い、その結果、ヒルデブルフの兄と息子が戦死することになったのであれば、どうしてヒルデブルフは、ジュートのその忠誠心を称えられようか、という意味である。確かにジュートは、ヒルデブルフに対して真率の忠誠心を尽くしていたであろう。ただ、結果的にフレーザンのジュートの行為によって、ヒルデブルフの兄と息子は戦死し、また後に夫のフィンも他界することになるのであり、そのような状況を引き起こしたジュートは、ヒルデブルフの信を裏切ったに等しいという意味が、その表現に含まれているのであろう。

ところで、『フィンズブルフの戦』には勿論であるが、『ベーオウルフ』のフィン王の挿話においても、フレーザンの側とデネの側の双方にジュートがいたとは、はっきりとは述べられていない。つまり、ジュートについての記述が曖昧にされているのである。フレーザンの側にジュートが属していたということは

Hosei University Repository

明言されているが、一方デネの側にもジュートが属していて、そのジュートを率いているのが Hengest であったということは、明確に述べられていないのである。

そこで、『ベーオウルフ』研究の第一人者とも言うべきチェインバーズは、ジュートが属していたのはフレーザンのみであり、デネの側にはジュートはいなかったとし、デネの側にいた Hengest は、あくまでデネの人であり、従って、ベーダや『アングロ・サクソン年代記』に言及されている、ブリテン島に最初に移住したジュートの代表の Hengest とは別人であるとした(11)。例えば、チェインバーズ以前に、チャドウィック他の、有力な学者が、「フィン王の挿話」に登場するジュートについて、それが曖昧な記述をされている点には触れず、ブリテン島に最初に定住したジュートの代表の名前が Hengest であるということ、Hengest という名前が稀であるということ、そしてフネフのデネの側の将軍が Hengest という名前であること等を通して、二つの Hengest の名前の人物は同一人物であるとしていることに対して、チェインバーズは、その見解を理解し難いものとして批判しているが (12)、「フィン王の挿話」の文面を通して見る限りにおいては、チェインバーズの主張は正しいもののように思われる。

そのチェインバーズの主張に対して、「フィン王の挿話」の文面を通しても、デネの側にもジュートが属していたことが明らかであると述べるのは、トールキンである。そこでトールキンの主張を見ることにしたい。

4.

まず、トールキンは、「フィン王の挿話」の冒頭のヒルデブルフの心象を表わした表現について、そこに二通りの解釈が成立し得るとしている (13)。すなわち、一つは、(a) ヒルデブルフがジュートの真率さを称える理由がなかったのは、確かにジュートには真率に行動していたが、その真率さが彼女に不幸を招いたからであるとするもの、そして、もう一つは、(b) ヒルデブルフがジュートの真率さを称える理由がなかったのは、ジュートには真率に行動していたのではなく、実際に背信行為があったからであるとするものである。トー

Hosei University Repository

ルキンは、一般的には（b）のほうの解釈が広くなされているが、「フィン王の挿話」には、実際に背信行為について示唆する表現は見出されないので、(a)のほうが、事実を表わした解釈であろうと思うと述べている。筆者もトールキンの考えに共鳴する。つまり、前述のように、たとえジュートが、ヒルデブルフとフィンに、真率な忠誠心を示しても、ジュートのとった行動が、結果的にヒルデブルフにこのうえない悲劇をもたらしたならば、たとえジュートにヒルデブルフに対する直接的な背信行為がなかったとしても、ジュートを称える理由はない、という意味が、「フィン王の挿話」の冒頭のヒルデブルフについての言葉であると考えられるからである。

トールキンは、「フィン王の挿話」のHengestとベーダのHengistが同一人物であるか否かという問題について、「フィン王の挿話」と『フィンズブルフの戦』の他には、Hengestという名前が、イングランドに来たジュートの冒険者そして首長の名前として以外には、知られていない[(14)]として、次の４つの事柄を挙げ、二人を同一人物とする。すなわち、(1) いずれも珍しい名前であること、(2) いずれも同時代人で、同じ海域の冒険者であること、(3) 一人はおそらくはジュートで、ともかくもジュートの代表であり、ケントのジュート王国の開祖としてみなされていた；もう一人は、Eotena、Eotenumという名前が明らかに重要な要素として登場する物語の最も重要な人物であり、またそのEotena、Eotenumという名前は、それ自体、ほぼジュートとみなされて来たこと、(4) ケントの伝承では、『ベーオウルフ』と同じように、フィン王がフォルクワルドという名前になっていることである[(15)]。トールキンは、それらの事柄を、決定的な論拠であるわけではないとして、さらにEotena bearnについて議論を進めるわけであるが、上の４つの事柄、特に（1）～（3）に基づいて、二人のHengestが同一人物であり、またジュートであるとしているのは、結論的には、チャドウィックの見解に近いと言えよう[(16)]。Eotena bearnとは「フィン王の挿話」に何回か現われる表現で、「ジュートの子どもたち」という意味であるが、実際にはジュートを表わしている。その表現を前述のチェインバーズは、デネの側のジュートとし、一方、チャドウィック等は、その表現についての綿密な検証なしに、それがデネの側のジュートとであるとしていたのであった。トールキンは、そこで、そのEotena bearnという表現を追究して、

Hosei University Repository

チェインバーズとは異なり、それがデネに属するジュートであるという結論に至ったのである。チェインバーズとトールキンの Eotena bearn についての解釈については、筆者は比較的詳しく論じたことがあり、ここでは深く立ち入らないが [17]、そこで明らかになったのは、もともと「フィン王の挿話」においては、Eotena bearn を含むジュートについての記述が曖昧であり、チェインバーズもトールキンも、その曖昧さ故に、Eotena bearn の解釈が困難を極めるとしているということ、それにもかかわらず曖昧な文脈を通して両者が試みた解釈を通して、トールキンの見解のほうがやや説得力があるということ、そして、両者はいずれも、その曖昧さの原因には関心を示していないが、実はその曖昧さこそ「フィン王の挿話」に見出される『ベーオウルフ』の著者の脚色あるいは独創であり、『ベーオウルフ』の成立理由であるということであった。以上の点が「フィン王の挿話」の Eotena bearn を含むジュートについての記述の曖昧さから導き得る帰結であった。

それは、さらに敷衍すれば次のようにも言い得る。すなわち、Hengest はジュートであるが、「フィン王の挿話」ではジュートとは明確に述べられておらず、デネであるようにも書かれている；それは「フィン王の挿話」ではジュートは悪の存在で、デネこそが正義とされているからであり、『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」では、ジュートの英雄をデネの英雄として称賛する必要があったからである；また、そもそも『ベーオウルフ』は、デーン人のブリテン島への侵入の後、アングロ・サクソン人とデーン人の融和を目的に作られた可能性がある。

いずれにせよ、トールキンにより、『フィンズブルフの戦』そして『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」に描かれた戦いの後、Hengest がジュートを率いてブリテン島を目指したという説が、さらに事実に近いものであることになったのである。

5.

トールキンの説をふまえて考えると、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」の内容は、その挿話の内容の前後も含めて考えれば、

Hosei University Repository

次のようになるであろう。

ジュートであったと思われるHengestは、紆余曲折を経て、デネの有力な王族のフネフのもとで、軍隊の統括者になっていた。フネフが、妹ヒルデブルフの夫であったフレーザンの国王フィンの館を訪れた時に、Hengestは、デネの軍を率いて、フネフとともにフレーザンに向かった。一方、フィンの下のフレーザンには、すでに別のジュートがいて、やはりフレーザンの軍隊の一翼を担っていた。そしてそのジュートと、Hengestに率いられていたフネフの下のジュートの間には、もともと反目があり、とりわけフィン王の下にいるジュートが、フネフの下にいるジュートに対し、深い憎しみを抱いていた。何らかのきっかけで、デネとフレーザンの間に戦いが生じる。おそらくそれは、フィン王の下のジュートがしかけたものと想像される。フィン王の下のフレーザンの軍隊が、フネフの下のデネの軍隊に攻撃をしかけ、それに対してデネの軍隊が防戦するという形で、第一次の戦いが生じる。その戦いが、部分的に残されている『フィンズブルフの戦』の内容である。その戦いによって、兄と息子を失ったヒルデブルフにとっては、そのような状況を引き起こしたフィン王の下のジュートに対して、たとえ彼らがヒルデブルフとフィン王に真率の忠誠心を示していたとしても、それを称えるわけにはいかなかったのである。

フレーザンの側のジュートと、Hengestが属していたデネのジュートとの間の反目について、トールキンは、次のように述べている。ユトランドにジュートが居住していた時、ジュートの中で、渡来して来たデネと戦うか敵対的な行動に出る一派と、デネと協調して、ユトランドに残る一派と、二つに分かれた；前者は、戦いを継続できずにユトランド半島から脱出し、西へ移動し、フレーザンのもとで軍事を任されながら居留生活を送る；一方は、ユトランドに残り、デネの、やはり軍事的役割を担う；そこで、フレーザンに移住を余儀なくされたジュートにとって、デネのフネフの下にいるジュートが、反目の対象になったことは疑いない、と[(18)]。トールキンは述べていないが、フレーザンの下にいるジュートが、デネと共同歩調をとったジュートを、裏切り者、故国への背信者としてとらえた可能性もあるであろう。フレーザンとデネの王族の間に婚姻関係が生じ、デネのフネフがフレーザンのフィンに嫁いだ妹ヒルデブルフに会いに行く時に、護衛としてジュートのHengestが兵を率いて同行する。そ

Hosei University Repository

れに対して、フレーザンの側のジュートが、過去の憎しみを、フネフと、その下にいるジュートへの襲撃という形で晴らそうとしたものと思われる。そのように推測しない限り、「フィン王の挿話」の最初の戦いの原因は、説明のつかないものになるのではないだろうか。まさに、「フィン王の挿話」の最初の「ヒルデブルフは、ジュートの真率、忠誠心を称える理由はなかった」のである。昔のジュートの間の怨念を、デネを巻き込んで晴らそうとしたのであるから。フレーザンとデネの双方にジュートがいたとするトールキンの説は、確かな説得力を持っていると言えよう。

今はその大部分が失われている『フィンズブルフの戦』からは、その戦の原因について、言及がなされていたかは不明である。しかしながら『フィンズブルフの戦』で残されている部分から推測されるのは、前述のように、デネとフレーザンの双方の軍隊の熾烈な戦いぶりであり、少なくともその中で、フレーザンの軍隊の側の奸計は想像できない。双方の側の戦いぶりの見事さが主題となっている。つまり、たとえデネとフレーザンの双方にジュートが分かれて、それぞれの国を支える軍隊の中枢部分を担っていたとしても、そこにおいて双方のジュートの間に不和があったか否か、それが戦の原因であったかどうかは作者には重要ではなかったものと思われる。つまり、前述のように、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」においては、『フィンズブルフの戦』にはなかった大幅な脚色がなされたものと考えられるのである。

6.

以上述べてきたことから言えることは、Hengest がジュートであり、デネに属するジュートとして、『フィンズブルフの戦』を戦い、そして「フィン王の挿話」で描かれたように、フィン王を斃した後、ブリテン島に渡り、アングロ・サクソン人による最初の王国であるケント王国を作ったということである。その場合、デネの将軍であった Hengest は、他のジュートの人々とどのように関わり、ブリテン島に渡ったのであろうか。フィン王を斃した後、デネに属していたジュートは、そのまま Hengest と行動を共にしたであろうことは、想像に難くない。一方、フレーザンに属していたジュートはどうだったであろう

Hosei University Repository

か。

『フィンズブルフの戦』で、デネとフレーザンの間に、そしてその双方の側のジュートの間に、過去の遺恨があったとしても、最初の戦いであるフィンズブルフの戦いが終わり、和解の協定が結ばれ、それでひとまず相互の関係は修復したはずであった。少なくとも、フィン王の意識の中では、修復していたであろうと思われ、またフレーザンの側のジュートも同じであったであろう。フィン王に対する復讐の念が燃え上がるのは、デネの王族のほうで、ジュートであるHengest自身は、必ずしも復讐の念を抱き続けているわけではなかった。チャドウィックのように、Hengestは、デネのフネフの復讐には加わらず、ブリテン島を目指して旅立ったとする解釈もあるが[19]、Hengest自身は、フィンズブルフに留まっている間、当初デネに戻ることを考えていたのは事実である。おそらく文脈を追えば、季節が変化して、冬から春になった時、初めてHengestは復讐の念が生じ始め、フィン王を倒す計画に参画したものと思われる[20]。その、第二次のデネとフレーザンとの戦いの時に、フレーザンの側に属し、Hengestに遺恨を感じていた有力なジュートは、既に戦死していたか、その時に戦死したと思われ、フィン王の斃れた後のフレーザンで、フレーザン側の多くのジュートが、行き場を失っていたことは十分に考えられる。Hengestは、「フィン王の挿話」では、あくまでexileとしての存在を強調されているので[21]、デネに帰っても、確固とした位置は見出せなかったことが暗示され、また、それはフレーザンの側にいたジュートにとっても同じであっただろう。相互に対立していたジュートの、フレーザン側の代表が戦死した後では、フレーザン側のジュートも、Hengestによる呼びかけがあれば、それに呼応してHengestと行動を共にする意思が芽生えていたのではあるまいか。それで双方のジュートがHengestのもとで、ブリテン島に向かったものと推測されるのである。ベーダの伝承には、ブリテン島に移住した人々の中に、デネ（デーン人）も含まれていたという記述も見出される[22]。それは、アングルでもなくサクソンでもなく、ジュートとともにHengestのもとでブリテン島に渡った人々であろう。ブリテン島に渡ったアングル、サクソン、ジュート、そしてフリージアンのうち、ジュートは、アングル、サクソンとは異なり、ベーダにおいても、『アングロ・サクソン年代記』においても、その代表者が明記

Hosei University Repository

されている。その代表者の一人 Hengest が、『フィンズブルフの戦』そして『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」に言及されている Hengest と同一人物であるのであれば、私達は乏しい文献資料をもとに、上のような、ジュートのブリテン島への移住の軌跡を再構することが出来る。それは確証され得るものではないが、中世初期のアングロ・サクソン人の成立状況を明らかにするための一つの重要な手掛かりになるものと思われる。

［注］

(1) *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3rd ed.. D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950. 本稿では、『フィンズブルフの戦』および『ベーオウルフ』の稿本について、クレーバー編の第 3 版を用いる。

(2) *Beowulf*, ll.1071-1159.

(3) Beda（Bede）. *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*,ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956, Ⅰ－ⅩⅤ；*Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. John Earle and revised by Charles Plummer,2 vols, Oxford,1892－99,vol. Ⅰ. ラテン語によるベーダの『英国民教会史』では、その人物は Hengist となっているが、その『英国民教会史』を古期英語に直したアルフレッド大王の翻訳では、Hengest となっている。本稿では、ベーダに言及されている Hengist（ヘンギスト）とアルフレッド大王の古期英語訳の Hengest（アルフレッド大王の古期英語の発音ではヘンジェスト）について、古期英語の Hengest という綴りで考えることにする。従って、その Hengest という人物は、『フィンズブルフの戦』および『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」における Hengest と同じ綴りになる。

(4)「『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について」、『異文化の諸相』第 31 号、日本英語文化学会、2011 年。

(5) *The Fight at Finnsburg*, ll.3－12. 筆者による拙訳。

(6) *Beowulf*, ll, 1071－1072. 筆者による拙訳。

(7) その表現は、古期英語特有の litotes「曲言法」であるとされている。そうであれば、ヒルデブルフに対する真率の忠誠心が存在していなかったということになるであろうか。筆者はその立場はとらず、フレーザンの側のジュートは、あくまで忠誠心を示していたが、結果的に、悲劇をも

Hosei University Repository

らしたとする考え方をとりたい。Cf. H.O’ Donoghue, *Beowulf*, Oxford University Press, 1999, Explanatory Notes, p. 114.

(8) *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed, Fr. Klaeber, p. 235 fn.

(9) Chambers, R. W. , *Beowulf —— an Introduction to the Study of the Poem*, edited and supplemented by C. L. Wrenn, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, p. 544.

(10) Tolkien, J.R.R., *Finn and Hengest*, ed. A. Bliss, HarperCollins Publishers, London, 2006, pp.100－101. 本稿で取り上げるトールキンの説は、アラン・ブリス編の *Finn and Hengest — the Fragments and the Episode*（2006）に拠っている。トールキンは、『指輪物語』、『ナルニア国物語』等で知られるファンタジーの作家であるが、もともとはイギリスの伝統的な英語学者であった。ブリスによって、その序文に詳しく述べられているように、ブリスが1960年代に、ある学会で“Hengest and the Jutes” という表題で発表をしたところ、同僚から、その結論部分がすでに数十年前にトールキンの連続講義で展開されていたことを知らされる。1966年にブリスがトールキンを訪ねて、その旨を話すと、トールキンは数日後、Finn と Hengest の挿話についてのトールキンのすべての原稿を、ブリスの研究に供して欲しいと、手紙を送って申し出た。原稿は統一されていないままの状態だった（ブリスは言及していないが、ブリスは一読した後、トールキンにその原稿を返したものと思われる）。その後1973年にトールキンは他界する。原稿はその時点においても不統一の状態であった。その原稿はトールキンの息子クリストファー・トールキンによって、再びブリスのもとに送られた。その原稿を前に、ブリスには様々な思いがよぎったが、最終的にトールキンの原稿の編集と刊行を決意するのである。それがブリス編集による、初版が1982年の *Finn and Hengest — the Fragments and the Episode* である。トールキンは、「フィン王の挿話」そして『フィンズブルフの戦』についての見解を、自ら書物の形で刊行することはなかった。『ベーオウルフ』研究史上極めて重要なそのトールキンの原稿を編集、刊行したブリスの功績は計り知れないものがある。

(11) Chambers, edited and supplemented by C. L. Wrenn, *op. cit.*, pp. 443－444.

Hosei University Repository

（12）Chambers, *ibid*., p. 249；pp. 443－444.

（13）Tolkien, ed. A. Bliss, p. 95.

（14）*ibid*., p. 66.

（15）*ibid*., p. 67.

（16）Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation*, Cambridge University Press, 1907, pp. 52 － 53.

（17）「『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について（2）―― R.W.Chambers と J.R.R.Tolkien の説を中心に」、『異文化の諸相』、第 32 号、日本英語文化学会、2012 年、を参照。

（18）Tolkien, ed. A. Bliss, *op. cit*., pp. 100－101.

（19）Chadwick, *op. cit*., pp. 52－53.

（20）*Beowulf*, ll.1136－1145.

（21）*Beowulf*, l.1137.

（22）Beda, *op. cit*., Ⅴ－9.

Hosei University Repository

ABSTRACT

Hengest and the Jutes in *the Fight at Finnsburh* and *the Finn Episode in Beowulf*

Michio IWAYA

The Fight at Finnsburh is one of the oldest poems written in English and it is the story about the battle between the Fresan (Frisians) and the Dene (Danes) . The same story is found in *Beowulf*, the largest epic in Old English, and it is generally called *the Finn Episode*. In the *Finn Episode* are mentioned the Jutes, who belonged to the Fresan and had something with the battle. The Jutes were one of the Germanic tribes who migrated to Britain, establishing the Anglo-Saxon kingdoms.

In both works can be found a man named Hengest. He was the leader of Danish army and accompanied Hnæf, who was of the Danish royal blood, to guard him with his men. Hengest is presumed to be the same man that Bede referred to as Hengist who first settled in Britain as the leader of Jutes to establish the Kentish kingdom. In *the Finn Episode* Hengest is not referred to as a Jute but a Dane. But if he had been the man mentioned as Hengist by Beda, he must have been a Jute and his men were also Jutes.

This paper first seeks the reason why the battle broke out and attempts to clarify the role of the Jutes in it. It also tries to seek why in *the Finn Episode* Hengest is not referred to as a Jute but a Dane, and how he could lead the Jutes for and against him to Britain after the battle.